

平成21年度大学院教育改革支援プログラム
「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」
「キャリア形成のための院生自主企画」実施報告

． 自主企画の内容

(1) 企画の名称

「教育場面におけるエスノメソドロジー」

(2) 開催日時・会場

2009年8月1日(土) 10:30～17:30 N棟339室

(3) 講演者

樫田 美雄(徳島大学 総合科学部准教授)

(4) 企画者

櫻井 裕子(人間文化研究科博士後期課程社会生活環境学専攻)

佐藤 令菜(人間文化研究科博士後期課程社会生活環境学専攻)

(5) 支援教員

栗岡 幹秀(文学部人文社会学科教授)

(6) 参加人数

9名(内訳:[学内]教職員2名,大学院生5名,[学外]2名)

(7) 自主企画概要

エスノメソドロジーとは、人々の日常の中での相互行為を丁寧に記述していくことを通して社会を理解しようとする、社会学の研究方法の一つである。この方法による分析は、医療、法廷、教育、企業オフィスなど、様々な場面の分析に応用可能であるが、本セミナーでは何らかのかたちでの教育場面に焦点を絞る。狭義の学校の教育現場ではもちろんさまざまな相互行為がみられるが、ここではそれに限定せず、大学における授業や教員による個別ガイダンスの様子、あるいは留学生あるいは下級生に対するチューターによる指導や、友人同士のなかでの何らかのテーマの説明場面など、参加者が容易にデータを作成できる状況を調査対象に設定する。これら広義の教育現場での相互行為をエスノメソドロジーの視点から分析・解釈・理解するという課題を、具体的にデータを作成しながら検討および議論がおこなわれ

た。セミナーの前半は、参加者が分担して「自閉症の社会学」(竹中 均著 世界思想社)のレジュメをきり、読んでいった。ここでは、自閉症スペクトラムの人たちのコミュニケーションの特徴やそこからエスノメソドロジーでの会話分析にどのような示唆が得られるかについて検討が行われた。午後からは奈良女子大学博士課程に所属の学生によって実際に採取された教育場面の相互行為のビデオデータが発表され、そのデータについて実践的に会話分析が行われた。当日の参加者は7人と、決して多くはなかったが、日頃エスノメソドロジーを用いて研究している参加者もあり、有意義な討論をする事ができた。参加者からのセミナー全体の印象は良く、「方法論について意義ある示唆を得られた」「勉強になった」等、満足のいく討論やセッションができたとの感想が得られた。

・実施報告

1. 「自閉症の社会学」

1.1 高みの見物は可能か エスノメソドロジー

違背実験はエスノメソドロジー初期の研究において提唱されたアプローチであり、人々が日々起こることにどの様に理屈をつけているのかを浮き彫りにするものである。この実験では、ある状況下において、期待される行動と全く違う行動を行った場合、相手=被験者がどのように反応するのかを観察記録するものである。この違背実験が行われたときの被験者の当惑は、自閉症スペクトラムの人とコミュニケーションを行ったときの当惑に似たものである。なぜなら、この当惑が発生する理由はその状況のなかでの暗黙のルールを破っているからである。しかし、自閉症スペクトラムの人がおこなう行動は「奇妙な行動」であるといえるのだろうか。状況が読み取れず、当惑するのは違背実験の被験者も、自閉症スペクトラムの人に接した人も、自閉症スペクトラムの人も同じである。また、ある状況下に暗黙の了解があるのと同様に、自閉症スペクトラムの人たちにも自分なりの秩序とそれを回復する手段をもっており、彼らからしてみれば、自閉症でない人たちのやり方は「奇妙」なのだ。エスノメソドロジーの研究者も自閉症スペクトラムの人も、自分を高みに置くことはできない。なぜなら、普通の人が行いがエスノメソッドならば、研究もエスノメソッドによっておこなわれ、そしてどちらのエスノメソッドがすぐれているかは一概には言えないからである。つまり、どちらが普通の行為でどちらが普通でない行為かは分からないからである。

1.2 おうむ返しの彼方に 会話分析

エコラリアとは、自閉症スペクトラムの子どもがする「おうむ返し」のことである。エコラリアには、聞いた言葉をその場で繰り返す「即時的エコラリア」と聞い

た言葉を別の場所、別の時間にくりかえす「遅延性エコラリア」の 2 種類がある。しかし、このエコラリアはある特定のものや状況を正確に模倣したものである為、その自閉症スペクトラムの人と同じ情報を所有していなければ相互理解が成り立たない。また、エコラリアは質問・回答といった会話の暗黙の期待を裏切るものである。そのため、エコラリアはコミュニケーションの言葉ではないという事が言える。通常、会話を行う際には質問されたら、回答する、挨拶には挨拶をかえす、呼びかけには応答する、といった隣接対がある。コミュニケーション能力とはつまり隣接対を形成していく能力とも言うことができる。エスノメソドロギーにおける会話分析は、この会話を当たり前に築き上げているものは何かを見つけ出していくものである。しかし、自閉症スペクトラムの人の場合は、誰にでも当たり前とされていることには気づかなかつたり分からなかつたりする。そのため、トラブルの状況や、本人の行動の結果、他人の気持ち、適切な行動の結果などを考慮して分析しなければならない。

2. 参加者によるビデオデータの発表

参加者によるデータ発表

午後からは参加者による相互行為場面のデータ発表と実践的な分析が行われた。行われた発表は2つで、それぞれ撮影された相互行為場面のビデオデータを参加者全体で共有し、具体的に分析していった

2.1 発表1

「笑いによる会話の協同的達成 在宅 ALS 患者と看護学生のやりとりから 」

この発表は、筋萎縮性側索硬化症（以下、ALS）による言語障害がある患者とボランティアの看護学生がどのようにコミュニケーションを行っているか、の一端を解明することを目指したものであった。会話をスムーズにすすめていくためには、適切なスピードや相槌などが要求される。しかし、言語障害があり、通常のスピードによる会話や相槌が困難である ALS 患者がいる場面でのコミュニケーションは、それと同様ではないだろう。ここでは、そのような場面のコミュニケーションはどのように進行しているのかという疑問に焦点が当てられた。発表されたビデオデータは全尺約2分の相互行為場面であった。参加者は配られたビデオデータのトランスクリプトを参考にしながら、ディスカッションを行った。


ALS 患者は呼吸が困難なため、人工呼吸器を装着しており、発生することができなかつたり、口唇をすばやく動かす事が困難なことがある。そのため、ALS 患者のゆっくりとした唇の動きや不確実な音声を読み取るという方法で会話が成立していく。このデータには、ALS 患者の笑い（無声音の微笑み）や看護学生たちの笑いが

多くふくまれていた。そのため、議論の焦点はおもに相互行為のなかの「笑い」の働きについて行われることとなった。ここでは、会話の中にみられる「笑い」には、話題を終結させる働きや、返答を承認したことを示す働き、発言の意図を理解したことを示す働き、そして発話の困難な ALS 患者が、相互行為の場に参加している事を示す働きを持つものであると理解された。つまり、「笑い」は会話を協同的に達成させる方法となっていたことが分かった。

2.1 発表 2

「写真鑑賞の相互行為分析 『奈良今昔写真集』を介した夫婦のコミュニケーション」

この発表は、一組の夫婦の間で行われる写真の鑑賞行為の場面を分析したものであった。奈良市内に長年住むある夫婦が、奈良市の昔の写真を見ながらコミュニケーションする様子をビデオ撮影し、二人のあいだではどのような会話がなされており、そしてその会話はどの様に成立しているかを検討していった。検討されたビデオの長さは約 2 分 30 秒であった。配布されたレジュメには、夫婦の会話データをもとに作成された詳細なトランスクリプトが添付されており、参加者は発表 1 同様に、それを参考にしながらそれぞれの会話に検討を加えていった。



30	0:18:34	妻	： 「lar、これやって、明治期の奈良市役所って書いてあるよ。」
31	0:18:37	夫	： それか、[読めて、読けてもてんや。(写真 5 を指差す)]
32		妻	： [明瞭]
33	0:18:39	妻	： 「>これでしょ、焼けたんは、<(写真 4 を指差す)」
34	0:18:40	夫	： 「>違うの、これ(写真 5)が焼けて木炭になったの=」
35		夫	： 「=(写真 1)これ、これは、30、20 <」 (写真 5 を指差した後、1 を指差す)
36		妻	： 「うーん、[これ焼けたて書いてる=」
37	0:18:45	妻	： 「=>これ焼けたて書いてる、<昭和初期に=(写真 4 を指差す)」
38	0:18:50	夫	： 「あー：はんと：！」
39		妻	： 「[これ、何て書いてあるんかな?」
40		夫	： これ、[4年] [えっと(写真 4 と写真 1 を見比べる)]

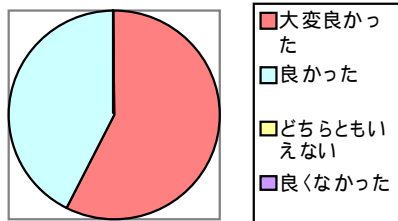
この相互行為場面では、夫は「昔」の奈良のことを「より知っている者」、妻は「より知らない者」という立場があらわされていた。ここでは、知っている / 知らないという知識の非対称性だけでなく、知識へのアクセスの優先性に差があることから、情報の教授に一定の傾向がみられた。つまり、夫は昔の奈良について説明する者として、妻はそれを聞く者としての位置取りが相互行為全体をとおして形成されていた。しかし、妻は「説明を聞く立場」をとりながらも夫が提供する情報をそのまま承認しているわけではなく、その真偽を「今」の自分の知識や写真のキャプションを参照することによって判別していた。今回のデータでは、知識へのアクセスの優先性が、発話の権限を付与する元となる事が分かったが、妻が写真を鑑賞するペー

スによって、夫の発話が制限されている事も分かった。つまり、「写真集をめくる」という行為が妻によってなされている為に、夫の「写真を説明する」という行為の始まりや終わりが、妻によって意図せず統制されていたのだ。これら一連のコミュニケーションの分析から、「説明する者」と「聞き手」という発話における位置取りは、必ずしも能動/受動の関係ではないということが分かった。

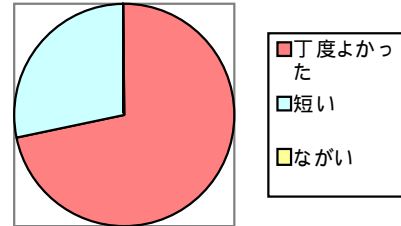
また、コミュニケーションにおける、「身体の動き」についても検討された。つまり、夫が「昔」の奈良について説明する際に、写真集から体を離し、いすに深く腰掛ける様、眼鏡を外す様、に注目し、「記憶」と「知識」の関係やその違いについても検討された。

3. アンケートの集計結果

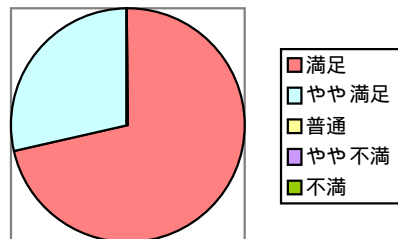
1. セミナー全体の印象はいかがでしたか？



2. このセミナーの時間はどうでしたか？



3. 討論やセッションはいかがでしたか？



4. 本セミナーに参加した感想をお聞かせください。

- ・ 方法論について意義ある示唆をえられた。
- ・ 勉強になりました
- ・ 会話分析の具体的な分析の仕方がよくわかった

教育場面におけるエスノメソロジー

エスノメソロジーとは、人々の日常の中での会話や相互行為を丁寧に記述し、分析していくことで社会を理解しようとする社会学の研究手法の一つです。

★ 講演者：櫻井 裕子（徳島大学）

★ 日 時：2020年8月1日

AM10:40～17:10終了予定

★ 場 所：日曜館339

★ セミナー内容

午前・・・「竹」 著『自然史の社会学』 世界哲新社
午後・・・「櫻井」 著『社会学の社会学』 世界哲新社

本セミナーは、徳島大学社会学部社会学専攻の学生及び社会人の方を対象として、英語での開催を行います。英語が苦手な方も大丈夫です。お気軽にご参加ください。参加費は無料です。お申し込みは、下記までご連絡ください。

★ 主催：徳島大学社会学部社会学専攻

★ 問い合わせ先：社会学部社会学専攻 櫻井 裕子
E-mail: yuko@ipc.ed.ac.jp

(文責：櫻井 裕子)